

聖書箇所: マタイによる福音書12章33-37節 (新約23頁)

「木が良ければその実も良いとし、木が悪ければその実も悪いとしなさい。木の良し悪しは、その結ぶ実で分かる。蝮の子らよ、あなたたちは悪い人間であるのに、どうして良いことが言えようか。人の口からは、心にあふれていることが出て来るのである。善い人は、良いものを入れた倉から良いものを取り出し、悪い人は、悪いものを入れた倉から悪いものを取り出して来る。言っておくが、人は自分の話したつまらない言葉についてもすべて、裁きの日には責任を問われる。あなたは、自分の言葉によって義とされ、また、自分の言葉によって罪ある者とされる。」

本日の聖書箇所、私が中心だと思っているのは34節です。そして、このイエス・キリストの言葉は、私の胸の奥深くに鋭く突き刺さってまいります。

かつて私は、自分ほど正しい人間はいないと思っていました。また、自分ほど優しい人間はいないと思っていました。自分が悪い人間だとか、自分が人に対して優しくない人間だなどとは、思ってみたこともありませんでした。むしろ、自分はこんなに良い人間なのに、人は自分のことを分かってくれない。何故、世間は私にこんなに冷たくするのだ、と不満を持っていました。ですから、私は教会に導かれても、イエス・キリストの言葉の中でも、自分に都合の良い言葉ばかり読んでいました。たとえば、ルカによる福音書6章20節の「あなた方貧しい人々は幸いだ」という言葉を読んで、文字通り貧しかった私は救われました。イエス・キリストも、そんな私を退けなさらず、温かく迎えてくださいました。すなわち、私が初めて通った教会の皆さんは、そんな私を暖かく迎えてくださったのです。

しかし、そのように、あるがままの私を暖かく包み込んでくださったイエス・キリストが、たとえば本日、実に厳しい言葉を私に向かってお語りになるのです。私にはイエス・キリストが次のように言っておられるように聞こえます。

「中川よ、お前は悪い実を結ぶ悪い木ではないのか。お前の言葉はいつも実にくだらないが、お前の心は悪いものばかりで満ちているのではないのか。」

昔、やくざ者から次のような言葉を聞いたことがあります。曰く、「吐いたつばは飲めんぞ。」

あまりきれいな言い回しではありませんが、人間は言葉一つで死ぬことがあると教えてくれた言葉でした。そんな言葉を聞いたりして、言葉は気をつけて語らねばならないということは思い知っているはずなのに、その後も言ってはならぬことをたくさん語ってまいりました。思わず口走った一言を、できることなら掴んで懐になおしたいと思ったことも、一度や二度ではございません。説教を語り、講義を語り、取り返しのつかない言葉を山ほど語ってまいりました。

私はここで、マルティン・ルターの言葉を思い出します。それは、彼が食卓で語ったといわれる言葉です。ドイツ語ではティッシュ・レーデンと呼ばれる一群の言葉に入っている言葉です。英語では、テーブル・トークと呼ばれています。その中の「よい説教者」と後に題された言葉において、ルターは次のように言っております、

「よい説教者は、次のような性質や徳の持ち主でなければならない。第1に、間違わぬ教えが述べられること。第2に切れる頭を持つこと。」

第3は後で申します。

「第4に、よい声を持つこと。第5に、記憶のよいこと。第6に、終了の仕方を心得ていなければならないこと。第7に、仕事を確実に熱心に行うこと。第8に、職務に生死、富と名誉をかけること。第9に誰からも迫害され、あざけられること。」

どれもこれも難しい言葉ばかりで、これでは一体誰が牧師になれるだろうかと思うほどです。私自身、第1の「間違わぬ教え」を述べているかどうか、自信はありません。第2の、切れる頭についても、外面的にも内面的にも自信ございません。第4の「良い声」については、全くだめでしょう。私は、政治家の鈴木宗男さんがしゃべっておられるのを聞くと、何と印象の悪い声だろうと思うのですが、実は私の声がそっくりなようです。これは、近親憎悪かもしれませぬ。次に第5の「記憶力」ですが、これもだめです。しかし、この第5番目の条件については、たぶんルターは、説教原稿を説教壇で読むことを戒めているのだらうと思われませぬ。テレヴィのニュースを読むアナウンサーでも、原稿を読んでいる様子を見せませぬ。読まずに語りかけるようにしています。あのアナウンサーは、他の記者の書いた原稿を読まされているのですから、読んで当然なのに、そのように語りかけるように読んでいるのです。その点、説教者は自分のオリジナルの原稿を語っているのです。もし自分の真実の言葉なら、チラッと原稿を見ただけで、ほとんど会衆のほうを見て、アイコンタクトを取りながら、語れるはずでせぬ。第6番目の「終了の仕方」もまた、重要でしょう。終わりそうで終わらない説教の恐怖を知らない信徒は幸せです。私はここで、八木重吉の詩を思い出します。たとえば「飯」という詩があります

こうです。

「この飯が無ければこの飯を欲しいとだけ思ひつめるだらう」

どうして、八木重吉は、この詩をこのように言い終えることができたのだらう。私だったら、きっとこの後に何か付け加えずにはいられないのに、と私は思ってしまうのです。説教の「終了の仕方を心得ていな」説教者は、たとえば八木重吉に学ばねばならないのかもかもしれませぬ。

第7、第8、第9の条件についてはコメントを省略いたします。

さてそこで、私がここでルターの卓上講話の言葉を引用した目的である、第3の条件をご紹介します。ルター曰く。

「適当に雄弁であること」

ルターが雄弁であったであらうことは、想像に難くありません。そのルターが「雄弁」という言葉に「適当に」という制限を加えていることは、私には実に重要なことに思えます。私はこの言葉から、ルターの自分の雄弁さに対する問題意識の深さを感じ取ります。ルターの説教はそのドイツ語原典の全集に数多く収録されています。残念ながら、日本語に翻訳されたものはまだ数少のうございます。そして、そのほんの少しを垣間見ただけでも分かることがあります。すなわち、ルターの説教には下世話な言い回しが多く登場するのです。他者を罵倒する言葉も、それ故に迫力があることも事実です。しかし、それ故にこそ、ルターは自分の多弁さを反省することが多かったのではないかと思われませぬ。ただ、実は私は、思わず言ってしまうことを言ってしまうルターの説教が大好きではあるのですが、やはり、反省しなければならぬ点があるということに同意いたします。

では、どうすればよいのでしょうか。口を慎めばいいのでしょうか。そうではないでしょう。言わないようにしていても、心の中で思っていたらもっと恐ろしいでしょう。作家田辺聖子の川柳に次の様なものがありました。

「そんなことないとお腹の中で言い」

話していても、本心を言わずにお腹の中で「そんなことない」と言われるほど恐ろしいことはありません。そうは申しませぬ、さすがに夫婦は本音を言うことがあるものです。結婚して、私の寝言を聞いた妻は申しませぬ。

「あなたは寝言が清められねばなりませぬ」

起きている時はうまいこと言っている、寝たら本音が出るのです。多分私は寝言で、「あの餓鬼、しばいたろうか」などと言っていたのではないかと思うと、ぞっといたしました。その後も私の心は清められていません。開き直るわけには行きませんが、それは事実です。私は悪い実のなる悪い木だと告白せざるを得ません。良い実とは何でしょうか。それは、愛の行為でしょう。私は、しゃべりすぎるほどに説教や講義を語りながら、たった一つの愛の行為ができない日々をすごしているのです。

では愛の行為という実がならないのだから、とにかく黙っていればいいと、そういう問題でもないでしょう。そこで、「心の底」が徹底的に問題です。「心の底」と言うと石原裕次郎です。「心の底までしびれるような、吐息が切ない囁きだから、涙が思わず湧いてきて、泣きたくなるのさこの俺も。

東京で一つ。銀座で一つ。

若い二人が初めて逢った、ほんとの恋の物語」

しかしこの歌の「心の底」とは、恋する人の「心の底」なのです。恋する人は、心の底までしびれたり、するものです。しかし、本日の説教を石原裕次郎で締めくくるわけにはまいりません。そこで、次のような歌を歌わざるを得ません。

ロード・アイ・ウォント・トゥ・ビー・ア・クリスチャン
という「霊歌」です。

ロード・アイ・ウォント・トゥ・ビー・ア・クリスチャン
イン マイ ハート
ロード・アイ・ウォント・トゥ・ビー・ア・クリスチャン
イン マイ ハート イン マイ ハート
ロード・アイ・ウォント・トゥ・ビー・ア・クリスチャン
イン マイ ハート

心の底まで、清められて、愛の行為に生きるクリスチャンとしていただくには、もはや主イエス・キリストにすぎるしかありません。ただいまの歌を後で日本語で歌いましょう。

祈り

神様、どうか私たちを、良い実のなる良い木にしてください。この祈り、主イエス・キリストのみ名によって御前にお捧げいたします。アーメン。